板東俘虜収容所における体育・スポーツ活動

—所外との関係を中心に—

山 田 理 恵（筑波大学）

（昭和63年12月15日 受付）

Turnen and sports activities of German war-prisoners in the Bando
P.O.W. Camp (1917-1920): focusing on the friendly
communications with people of Tokushima

Rie Yamada¹

Abstract

The purpose of this paper was to clarify the influence of the activities of German war-prisoners in the Bando P.O.W. (prisoner of war) Camp on the development of sport and physical education in Tokushima where the Camp was located.

The historical materials used for this paper were collected mainly from newspapers and “Keibi-Keisatsukan-Hokokusho” which was a report on the German prisoners’ life in the Bando P.O.W. Camp written by Japanese police sergeants.

The findings of this study were summarized as follows:

Students and teachers of some elementary and secondary schools went to see German prisoners’ activities such as Turnen, football, tennis, and hockey. And several prisoners visited schools to coach them for Turnen. In “German war-prisoners’ variety show”, German prisoners introduced their Turnen and sport activities such as gymnastics, wrestling, boxing, weight lifting and dance to students and people in Tokushima. “Japan Martial Arts Association Tokushima Branch” set up “Meeting for the Study of German Martial Arts” and invited eleven German prisoners to perform wrestling, boxing and fencing matches. Then the Association sent two Japanese members to the Camp to do further study of those activities.

This friendly communications with people of Tokushima which was brought from the German war-prisoners’ Turnen and sport activities gave a significant influence on sports in Tokushima, and this fact should not be neglected in the consideration of the history of sport and physical education in Japan.

(Rie Yamada, “Turnen and sports activities of German war-prisoners in the Bando P.O.W. Camp (1917-1920): focusing on the friendly communications with people of Tokushima”, *Japan J. Phys. Educ.*, 34—1 : 15—30, June, 1989)

1 Doctoral Program of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, Tennodai 1-1-1, Tsukuba, Ibaraki (305)

はじめに

鳴門市・板東は、ベートーベンの「第九」交響曲の日本初演の地として知られている。大正7(1918)年6月1日、演奏したのは、板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜たちであった。

第一次世界大戦の際、日本の青島攻略によって降伏したドイツ軍兵士約4,700名^{#1)}は、俘虜として、大正3年11月から12月にかけて日本各地の俘虜収容所に送られた。

板東俘虜収容所は、大正6年4月7日、当初開設されていた四国の松山・丸亀・徳島の三収容所を統合して徳島県板野郡板東町桧(現在の鳴門市大麻町板東)に新しく開設され、大正9年2月8日に閉鎖された。当時の日本の俘虜収容所のなかで「模範的収容所」と言われている¹³⁾この板東俘虜収容所では、約1,000名^{#2)}のドイツ兵俘虜たちが、大正9年1月に解放されるまでの間、体育・スポーツ活動をはじめ文化・商業・奉仕活動を行いながら収容所生活を送っていたのであった。また、俘虜たちは、これらの活動を通じて地元民との交流を深めた。

板東俘虜収容所では多彩で組織的な活動が為されていたということ、そしてそれらの活動は地元の体育・スポーツの普及・発達に寄与していたと考えられるということは、これまでの主な日本の体育・スポーツ史の叙途^{6),7),8)}のなかで示されたことはない。

板東俘虜収容所における体育・スポーツ活動についてはすでに拙稿²⁰⁾で明らかにしてきたが、本研究では、俘虜たちの活動と所外との関係に特に着目し、彼らの活動が地元の体育・スポーツの普及・発達に寄与していたという点について明らかにしたい。

なお、資料としては、主に、「警備警察官報告書」および当時の新聞を用いた。

「警備警察官報告書」(以下、「報告書」と略す)は、板東俘虜収容所の門前にあった「板西警察分署警備警察官出張所」の巡查郎長たちが、その分署長あてに収容所に関する内偵報告をしたもので、大正6年、大正7年の二年間分が「雑書編冊」

として5冊にまとめられている^{#3)}。

また、当時の新聞としては、大阪朝日新聞四国版(大正6年1月から大正9年4月まで)、徳島毎日新聞(大正6年1月から大正7年12月まで)、徳島日日新報(大正8年1月から大正9年4月まで)を調べた^{#4)}。

別表は、それらを検討した結果得られた体育・スポーツ活動関係の報告および新聞資料の一覧を年表にまとめたものである。なお、俘虜たちと地元民との関係や地元の反応を知るために、三新聞からは、体育・スポーツ関係だけでなく収容所に関する記事の見出しをすべて掲げてみた。本論では、これらの報告・記事を中心に論述をすすめていくことにする。

そのほか、板東俘虜収容所新聞“Die Baracke—Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan”^{#5)}、「板東俘虜収容所沿革史」^{#6)}等も用いた^{#7)}。

俘虜の生活と体育・スポーツ活動

大正6年8月24日付の田岡貢巡查部長の報告から、当時の俘虜たちの「日常生活ノ状況」を知ることができる^{#8)}。

「起床午前六時、就寝午後十時、運動=毎日午前七時半ヨリ全十時及午後二時ヨリ全五時三十分、其間構外運動場ニ於テ主トシテ【フットボール】【テニス】等ヲナシ(構内ハ随時)食事時間=朝午前七時、昼食十一時三十分、夕食五時三十分ニシテ其献立ハ…」

この報告から、俘虜たちは、収容所生活の余暇を主に体育・スポーツ活動で過ごしていたと考えられる。活動内容は、フットボール(Fußball)、テニス(Tennis)、シュラークバル(Schlagball)、ファウストバル(Faustball)、トライプバル(Treibball)、コルプバル(Korbball)、ホッケー(Hockey)、レスリング(Ringen)、ボクシング(Boxen)、重量挙げ(Stemmen)、トゥルネン(Turnen)、競歩(Wettgehen)、散歩(Spaziergang)、遠足(Ausflug)、水泳(Schwimmen)、九柱戯(Kegelspiel)、ビリヤード(Billard)など多彩であった。また、「スポーツ週間(Sportwoche)」

をはじめとする各種の競技大会や競歩大会、水泳大会、「スポーツと娯楽の夕べ(Sportliche Unterhaltungsabend)」等の催しが開かれた^{※9)}。

俘虜たちは、板東到着早々「スポーツ委員会(Sportausschuß)」を設立し、自分たちの作業によって運動場(後述)を建設することから活動を開始したのであった。収容所での体育・スポーツ活動を司っていたのはこの「スポーツ委員会」で、その傘下には、各種のクラブが組織されていた。これらのクラブは、いずれも会員制で、入会金を取り、月々会費を徴収して運営されていた。1918年8月の時点では、「テニスクラブ・板東(Tennisverein Bando)」^{※10)}、「新テニスクラブ・板東(Neue Tennis=Vereinigung Bando)」,「ハロークラブ(Halloklub)」(第三のテニスクラブ),「ホッケークラブ・板東(Hockey=Vereinigung Bando)」,「スポーツクラブ・松山(Sportverein Matsuyama)」,「丸亀フットボールクラブ(Marugame Fußball=Klub)」,「スポーツクラブ・砲兵隊(Sportverein M.A.)」,「収容所トゥルネンクラブ・板東(Lagerturnverein Bando)」,「スポーツクラブ・青年の力(Sportverein Jugendkraft)」,「ファウストバルクラブ【年配組】(Faustballvereinigung "Alte Herren")」,「シュラークバルクラブ【年配組】(Schlagballvereinigung "Alte Herren")」,が成立しており、活発な活動が見られた^{※11)}。

また夏季の水浴は、4組に別れて実施され、俘虜の水泳教官による無料の水泳教室もあった。

板東俘虜収容所当局は、大戦の状況や帰国の見通しなどから考えて、健康管理と精神衛生上、俘虜たちを所内に拘束することは好ましくないと判断し、散歩・遠足をはじめ各種の体育・スポーツ活動を積極的に認める方針をとっていた。大正6年10月2日付で東谷近蔵巡查部長は、「俘虜散歩ニ干スル報告」と題して次のように報告している。

「今回当俘虜収容所ニ於テ俘虜散歩ニ関シ別紙計画表ニ設ケラレ実施セラルル事ニ相成候ニ就テハ之ガ設ケラレタル原因(聞所ニ依レバ)欧州戦争モ何時終息ヲ告グルヤ前途尚オ遠達ナルヲ以テ目下ノ如ク俘虜ヲシテ管内ニ拘束スルハ健康ヲ害

スルノ虞レナシトセズ現ニ各収容所ノ俘虜ニシテ精神ニ異常ヲ来ス者續出スルノ有様ニシテ且ツ又逃走ヲ企ツル者ナシトセズ依テ今回其筋ニ於テモ散歩ヲセシメル方得策ナリトノ意見ヨリスノ如キ計画ヲ立テ俘虜ヲシテ精神上ノ慰安ヲ與ヘシムルノ趣意ニ出タル由ニ有リ候」

以上のような当局の方針と、「Die Baracke」の随所にみられるような俘虜たちの、健康保持と精神衛生にとって運動が重要である、という考え方があいまって、板東俘虜収容所では、約2年8カ月の収容所生活の間、特に身体活動が盛んであった。しかし、大正7年11月2日付の「休戦ニ干シ俘虜ノ感想内偵ノ件報告」で板東恒介巡查部長が、「……休戦条約成立スルヤ俘虜自営ノ工作及農園耕作ヲ中止シ尚ホ各種物品ノ購買運動外出等ヲ見合ハシ……」と報告しているように、休戦条約締結後、一時、俘虜たちは運動することを控えていた。

なお、先の報告にみられる「別紙計画表」によると、頻繁に実施されていた散歩・遠足では、俘虜を兵舎ごとに2班に分け、遠出の場合は両班合同、雨天の場合は中止(「代日ヲ與フル事ナシ」)、所外散歩が行われる日は所外運動場での運動は取りやめること、と決められていた。また、「散歩場所ハ其時之ヲ定ム」とあるが、行先・計画・指揮・責任はすべて俘虜の将校に一任しており、夏季の遠足は水浴も兼ねていた^{※12)}。

散歩・遠足実施日には取りやめることとされている所外運動場を使つての運動については、その後、「一定ノ門鑑ヲ有スル俘虜ニ限り外出セシメテ……為サシメルモノトス」と決定したことが報告されている(大正7年2月19日付の板東恒介巡查部長の「俘虜外出作業ニ関スル注意報告」)。

この所外運動場については、収容所長のはからいで「スポーツ委員会」が地元農民から収容所前の土地を借用し、そこに俘虜たちの作業によって各種の競技場がつくられた経緯が、「Die Baracke」に記されている^{※13)}が、地元農民から農地を借用するに至る経緯については、次の報告から知ることができる。

「俘虜収容所運動場及耕作地ニ干スル件」

図1 「収容所前の借用地」(「板東俘虜収容所案内書」¹⁾の38頁と39頁の間に付されている地図「収容所前の借用地」を転載したもの、なお、図中の()内の日本語訳は筆者による。)

當収容所ニ接属セル別紙図面ノ通り元陸軍省所有地ナリシヲ中森裡平外八名一反歩ニ付一カ年対四円ノ年貢ヲ以テ小作シツツアリシガ今回俘虜ノ兵ニ於テ収容所長ヲ介シ各小作人ヨリ六カ月ニ対シ四円ノ賦金ヲ以テ借受ケ運動場及菜園地トナルベキ筈ニテ目下工事中ニ有之候条此ノ段及報告候也、追テ目下植付ケ中ノ麦作等ニ就テハ各借受人ヨリ一反歩ニ対シ八円損害料ヲ交付スル筈モ有之候

菜園地及運動場ノ区域ハ工事進行ノ暁報告仕可候 以上」

また、「菜園地及運動場」のために農民から賦金と損料を支払って借り受けた用地は、「合計二町三反九畝十九歩、惣坪数七一八九坪」であったと報告されている。

なお、「菜園地及運動場ノ区域」についてのその後の報告は見あたらなかったが、大正7年8月に久留米から移送されてきた90名の俘虜たちに収容所の施設や収容所生活の様子を紹介するために所内印刷所から発行された「板東俘虜収容所案内書」¹⁴⁾の付録の「収容所前の借用地」という地図(図1はこの地図を転載したもの。なお、図中の()内の日本語訳は筆者による)によると、この時点では、所外運動場には、テニスコート(Tennisplatz)8面(さらに1面が造成中)、フットボール競技場(Fußballplatz)1面、トライバル競技場(Treibballplatz)1面(シュラークバル・ホッケーにも使用する)、ファウストバル競技場(Faustballplatz)1面が建設されていた。また、収容所近くの川には水浴場(Badeplatz)が設けられていた。所内には、やはり俘虜たちによってつくられたトゥルネン場(Turnplatz)や「スポーツクラブ・青年の力」のレスリングの練習場(Übungsplatz)、球技のための広場(Platz)、俘虜経営の九柱戯場(Kegelbahn)や撞球場(Billardraum)があった¹⁴⁾。

以上のように、所長をはじめとする板東俘虜収容所当局の俘虜に対する寛大で比較的自由な処遇のなかで、ドイツ兵俘虜たちは、多彩で組織的な体育・スポーツ活動を繰り広げたのであった。また、これらの活動に寄せる俘虜たちの期待や関心

は常に大であったことは、すでに明らかにしてきたとおりである¹⁵⁾。

所外との関係

俘虜たちは、体育・スポーツ活動をはじめ様々な分野にわたって地元の人々との交流を深め、数々の遺産をのこし、地元の発展に貢献した。地元民もまた、俘虜としてではなく文明人としての彼らと接し、いろいろな技術を学んだ。

1. 小・中学校教師・生徒の所内参観

俘虜たちの体育・スポーツ活動は反響を呼び、郡内の小・中学校の教師・生徒が収容所へ参観に訪れるようになった。大正7年5月29日付の板東恒介巡查部長の「俘虜運動施行ニ干スル注意報告」¹⁶⁾では、次のように報告されている。

「當俘虜収容所俘虜運動方法ヲ板野郡小学校教員見学ニ干シ板野郡長ヨリ當収容所長ニ宛協議中ノ処収容所長ハ之ヲ了トシ見学セシムル事トシ左記運動ヲ来ル六月一日収容所内外ニ於テ施行スル事相成候条此段及報告候也

記

1. 所外運動

「フットボール」「テボール」¹⁶⁾「テニス」「ホケイ」

2. 所内運動

機 械体操

追テ実科女学校教員(生教員)¹⁷⁾尋常高等小学校生徒約四十名対シ所外運動参観ヲ許可セシモ所内運動ハ参観ヲ為サシメス中途ヨリ退散セシメ候条申添候」

また、同巡查は、3日後の大正7年6月1日付「俘虜運動参観ニ干スル件報告」¹⁸⁾で、「客月二十九日附ヲ以テ俘虜ノ運動ニ干シ学校教員参観ノ件報告致置候処本日午後一時頃國友板野郡長ハ郡書記一名ヲ帯同シ撫養中学校長小森隆助外教員外九十五名ヲ引卒シ板東俘虜収容所門外ニ参集午后一時三十分松江収容所長ハ同所門外ニ参加者ヲ集合セシメ参観ニ干スル心得向キヲ懇切ニ訓示的演説アリ引続キ同所高木大尉ハ参観者ヲ引率シ俘虜経営ニ係ル農事及其他ノ作業場ヲ観覧セシメ同所内外ニ於テ俘虜ノ運動トシテ機 械体操及フットボー

ル外数種アリ中ニハ機^(マツ)械体操中尤モ妙技トシテ注目ニ値スルモノ甚少カラズ教育上参考ノ資料ヲ獲タル模様ニ有之午後五時退散及候条及報告候也」と報告している。

俘虜たちの体育・スポーツ活動は多様で、地元の人々にとって珍しいものも多く、直接それらの活動に触れ学ぶことができる絶好の機会として、小・中学校の教員・生徒が収容所に見学に訪れたのであった。中でも、トゥルネンの演技が特に教師たちの関心を集めたことがこの報告からも明らかである。

この件に関しては、“Die Baracke”でも次のように述べられている。

「6月1日に50人の日本人教師と体育教師が我々のトゥルネンを見物するようである。彼らは我々と運動場で会うことになっている!」(1918年6月2日発行の第II巻10号の記事「収容所トゥルネンクラブ・板東」, p. 273.)

また、日頃から鉄条網越しに俘虜たちの所内での活動を見物していた地元の人々は、頻繁に行われた遠足や水泳大会を通じて彼らとの交流を深めた。また、四国八十八カ所一番札所霊山寺境内およびその門前にあった旧板野郡公会堂において開催された「板東俘虜製作品展覧会」(大正7年3月8日—17日)では、レスリング、重量挙げ、器械体操(鉄棒、平行棒)などが披露され、参観人の関心を集めた⁵⁾。「参観人ノ主ナル者ハ各学校教員生徒在郷軍人、青年團ヲハジメ其他一般民ニシテ県民ハ勿論他府県ヨリ特ニ参観人」があった(「板東俘虜収容所沿革史」³⁾の中の「俘虜製作品展覧会」という見出しの報告文による)。郡内では、撫養小学校¹⁰⁾、林崎小学校⁹⁾、板東小学校¹⁹⁾が参観している。

大正8年4月17日に開催された「競歩大会」では、「気持ちの良いお天気恵まれて、このスポーツ行事は、俘虜たちばかりでなく、沿道の村人たちの高い関心のもとに経過した。」という“Die Baracke”の記事(1919年4月号の「4月17日の競歩大会について」, p. 128.)からも、地元の人々の関心が非常に高かったことが窺える。

また、当時を知る人々は、「俘虜たちは鉄製の重

いバーベルを苦もなくさし上げていた。こんな競技のあることを初めて知った村人たちが、収容所の鉄条網越しに、食い入るようにして見つめていたもの。棒の両端に石をくくりつけて持ち上げるなど、若い者は重量挙げのまねごとをするようになった」と話している¹⁷⁾ように、俘虜たちの所内での活動を日頃鉄条網越しに見物していた地元の人々が特に興味をもったのは、重量挙げであった。この重量挙げについては、当時、板東俘虜収容所で俘虜関係の郵便物を取り扱う通信係をしていた故・林豊氏(昭和54年に76歳で死去)の長男啓介氏(文献5)の著者)もまた、「父は生前、俘虜たちの活動の中で最も印象に残っているのは重量挙げである、と言っていた。父は、このような競技があることを初めて知って驚きながら見物していたが、地元の青年たちと、棒の両端に石をくくりつけて持ち上げ、重量挙げのまねをして遊んだ、と何度も繰り返し私に話してくれた」と筆者に語っている。

筆者はまた、「健在な地元の古老」として知られている富田弘氏(80歳、運送会社経営、鳴門市在住)に面接する機会を得た。当時、郡内の明神小学校の児童であった同氏は、次のように語っている。

「小学2、3年の頃、臨海学校が開かれた櫛木海岸で、遠足に来ていた俘虜たちに出会い、一緒に泳いだ。俘虜たちの帰国後、俘虜たちが収容所内で使用していた手製の家具や日用品が払い下げられ、私の家族も大工道具などを買った。そのとき10歳だった私には、テニス・ラケットを買ってくれた。私はそのラケットでテニスのまねごとをしてよく遊んだ。俘虜と一緒に泳ぎ、俘虜が使っていたラケットで遊んだことがきっかけとなって、後に進学した撫養中学では、入学してすぐ軟式庭球部に入部し練習に励んだ。」

以上のように、鉄条網越しに俘虜たちの活動を見物していた青年たちは、見物するだけでなく、俘虜たちの活動を通じて初めて見た重量挙げのまねをし、自分たちの遊びとして楽しんだということ、また、児童のひとりには、俘虜と一緒に泳ぎ、俘虜が使っていたテニス・ラケットを手にしてテ

ニスのまねをして遊んだことがきっかけとなって、後に進学した中学校では軟式庭球部に入部し練習に励んだということなど、俘虜たちの活動を通じて地元の人々はスポーツに親しみ、スポーツを愛好するようになったのである。

2. 学校への俘虜招聘と体操指導

大正7年6月11日付の板東恒介巡查部長の報告からは、俘虜を学校に招聘して実技指導を受けようとしていた、という事実を知ることができる。板東巡查部長は、俘虜が板野郡立農蚕学校に出張して昆虫や植物の標本を作製・指導し、同校の発展に貢献したことを述べたあとで、次のように報告している。

「猶次回適当ノ時季ニ於テ運動（金棒）ノ上達セルヲ招聘シ一般生徒ノ体育ヲ計ル目的トナリトテ頗ル喜色アリキ」

俘虜の体育活動を所内参観しただけでなく、俘虜を学校に招いて直接実技の指導を受け体操技術の向上を計ろうとしていた画期的な計画である。

鳴門市ドイツ館^{※18)}には、撫養中学校の運動場で、俘虜たちが鉄棒の技を生徒たちに見せているところを撮った写真が展示されている。この写真からも、上記の報告のように、体操技術向上のために俘虜たちを学校に招聘していたことがわかる。俘虜たちの演技を目のあたりにして驚嘆し、かつ緊張している生徒たちの表情が特に印象的である^{※19)}。

3. 「俘虜演芸会」

大正8年10月10日から4日間、徳島市の新富座で「俘虜演芸会」が開催された。この演芸会でも、俘虜たちの体育・スポーツ活動が徳島の人々に披露された。10月12日には、徳島中学校の生徒がこれを観覧している¹⁴⁾。

大正8年10月8日の徳島日日新報は演芸会について次のように報じている。

「●俘虜演藝會

プログラム發表

徳島衛生會主催の俘虜演藝會は既報の如く十日より三日間、當市新富座に於て開演すべきが平素彼らの組織せる演藝中の粹を抜き大ひに公衆に歐風の演藝を紹介せんとて熱心に出演する筈なれば定

めし面白からん毎日午後六時開場、三日間の演藝番組左の如し

◀音楽（行進曲）◀活人画（獨逸體育會競技を示す）◀獨逸相撲◀「ヴァイオリン」弾奏者と蜂◀木馬運動◀音楽◀獨逸舞蹈◀拳闘◀瓶の音楽◀逆立運動◀音楽◀「オバハイエルン」の田舎踊◀獨逸相撲◀喜劇（乞食の復讐）◀逆立運動◀平行棒運動◀音楽◀吊環力の運動◀拳闘◀重量大なる「アレー」型の鐵棒をあぐる運動◀音楽（日本軍艦マーチ）◀喜劇（毀はれた鏡）◀音楽（終りの音楽）

◎以上番組の内を三日間取換公演す

而も會員入場券は左の箇所に申し込まるべしと……」

この記事から、「木馬運動」、「平行棒運動」、「吊環力の運動」、「逆立運動」、「拳闘」、「重量大なる「アレー」型の鐵棒をあぐる運動」、「獨逸相撲」、「田舎踊」、「獨逸舞蹈」などが、音楽演奏や喜劇とともに、彼らの日頃の活動の粹を集めたものとして、徳島の人々を前に披露されたことがわかる。

さらに、10月13日の同新聞は、「俘虜演藝會一日日延べ」という見出しで、この演芸会が連日盛況で入場できない者が多いので、さらに1日追加公演されたということを報じている。

なお、「拳闘」はボクシング、「獨逸相撲」はレスリングのことであると考えられる。

「重量大なる「アレー」型の鐵棒をあぐる運動」すなわち重量挙げでは、鳴門市ドイツ館展示のパネル写真にみられるように、四角や球状の手製のバーベルを用いた。重量挙げが地元の人々の関心を特に集め、青年たちが重量挙げのまねごとをするようになったことは、すでに述べたとおりである。

また、同年10月9日の大阪朝日新聞四国版は、「俘虜の芝居、十日から徳島市の劇場で公開」という見出しで、新富座の「俘虜演芸会」に先立って収容所内でその試演を行ったことを報じている。中でも、「オバハイエルンの田舎踊」と「獨逸相撲」が以下のように取り上げられている。

「板東俘虜収容所の獨逸俘虜は来る11月中旬愈五年間の囚はれから放たれるといふ歡喜に皆々が

燥ぎ切つてゐるが去る三日の夜所内の演舞場で演藝會の試演を催し

▷喜劇としては『ヴァイオリン弾奏者と蜂』や活動写真でお馴染の『毀れた鏡』などがあつて大向ふ大喝采舞踏には『オバハイエルンの田舎踊』とあつて日本の盆踊りと云つたやうなものだが是れは一名『靴たたき踊』と云ひ男二人が舞踏の切れ目切れ目に向ひ合つて股、脛、靴、靴の裏を順々に忙しさに而も一定の律を置いてたたくので滑稽と云へば滑稽、野蛮と云へば野蛮な踊

▷此の外木馬運動や相撲などの餘興があつたが獨逸の相撲は両肩を床につけ両手を同時に床につけたものが負けとなるので日本の柔道の寝術に髣髴たるものだが行司君が説明の時に『満堂の諸君』なんとかやつて笑はせるのも餘興の一つであつた、此一座(?)は徳島市の衛生協會が會の基金を作る為の交渉に應じて来る十日頃市内の劇場に乗り込み玄人跣足の腕を見せるとあつて百度以上の熱心さで準備をさをさ怠りない(徳島)」

当時を知る人々によると、俘虜たちによって次々に展開されるこれらの演技を目のあたりにした観客は驚き、盛んな拍手と声援を送ったという¹⁸⁾。徳島県人ならずとも、当時の日本人なら誰しも、驚嘆したに違いない。

4. 大日本武徳会徳島支部による俘虜招聘と収容所への武道家の派遣

大正8年11月5日の徳島日日新報は、「獨逸捕虜演武會」という見出しで、11月9日に大日本武徳会徳島支部が板東の俘虜11名を招聘して「獨逸武術研究演武會」を催す旨報じている。

「大日本武徳會徳島支部は来る九日午前十時より縣會議事堂に於て板東俘虜収容所の獨逸俘虜十一名の武術家を聘し獨逸武術研究演武會を催ふす筈なるが仕合は

相撲二組(四人) 拳闘二組(四人)

剣術一組(二人)

にして准士官オイセフ(前獨逸大使館書記生)説明すと」

大日本武徳会徳島支部は「獨逸武術研究演武會」を開催し、俘虜たちによる「相撲」、「拳闘」、「剣術」の試合を俘虜の解説をもって研究することに

なったのである。なお、前述のように「相撲」はレスリング、「拳闘」はボクシングのことであり、また、「剣術」は、フェンシングのことであると考えられる。

さらに、11月22日の同新聞は、この研究演武會の結果として、次のように報告している。

「●俘虜を招聘す

過般大日本武徳會徳島支部は板東収容所の獨逸俘虜数名を聘し武徳研究をなしたる結果日本武術者も獨逸武道を練習するの必要を認め武道教授田中英太郎、森下千吉両氏を本日より二週間の豫定にて派遣し練習せしめ一説會員に對し普及すと」文中の「獨逸武道」とは、先の11月5日の記事で報告されている「相撲」、「拳闘」、「剣術」のことを指していると考えられる。

大日本武徳会徳島支部は、俘虜たちを招いてレスリング、ボクシング、フェンシングを研究した結果、日本の武道のためにもそれらを練習することの必要性を認め、今度は日本の武道家2名を2週間の予定で収容所に派遣し練習させ會員に普及させようとしたのであった。

以上明らかにしてきた内容から、ドイツ兵俘虜たちは地元の体育・スポーツの発展に寄与したと考えられる。

また、彼らの活動は、一般人にとっては娯楽として受け入れられたが、武道家にとっては武術的関心からレスリング、ボクシング、フェンシングの研究のために、また小・中学校においては体操技術向上のために、それぞれ重要な役割を果たしていたとまとめられる。ドイツ兵俘虜の活動は、一般人、武道家、小・中学校の教師・生徒という受け手の立場や意識の違いによって、それが持つ意味が異なっていたという点にも興味深いものがある。

お わ り に

本研究では、以下のような事実を明らかにした。

地元の人々は、日頃から鉄条網越しに彼らの所内活動を見物していたが、「俘虜演芸會」で披露される俘虜たちの演技に驚嘆し、競歩大会等にも高い関心を示した。地元の青年たちは、重量挙げの

8		・板東町物価高騰俘虜 が移り来たれる影響 で			
15	「俘虜収容所運動場及 耕作地ニ干スル件」				
19			・俘虜収容所の板東町 野菜栽培供給の計画 欧文電報の取扱い開 始。 ◇交渉委員俘虜中に農 学士が二名。 ◇十町歩の農園獨逸式 菜園及び野菜加工 物。 ◇四萬圓以上 送金一回に一萬圓		
20		・俘虜収容所ができた ため板東が享くる影 響。 郵便局の多忙と一や がて現るべき ドイツ風の農園			
25				ボーリング場開場 大麻神社への散歩	
27					
31			・俘虜収容所の蔬菜町 農会にて栽培		
6. 1		・ドイツ式農業開始俘 虜は使役せず			
11				テニスコート完成	
7.10					所内で第1回野外公演 川での水浴の開始
13				サッカー場開場 「スポーツクラブ・ 青年の力」の 「催し物の夕べ」 レスリング大会開始	
22					
8.12					
14					中国、対独宣戦布告
24	「俘虜ニ関スル件復命 トノ件」				
9.13					俘虜による木造橋建設 "Die Baracke" 創刊
30					
10. 2	「俘虜散歩ニ干スル報 告」			「スポーツ週間」始まる	
20					隔離分置所設置 ロシア革命
11. 7				「スポーツ週間」終了 散歩	
11					
16					
19		・俘虜の貯金六萬圓 ◇カゴの鳥生活まる三 年 ◇待どおしい平和の克 服			
30				撫養への遠足	
12. 2					第1回室内楽公演 独ソ休戦
15				散歩	
25					
大正 7					ウイルソン14カ条平和 原則発表
1. 8				散歩	
13					山材伐採事業開始
2. 5					
11			・俘虜製作品展覧 其他商品陳列会		
12		・俘虜作品展覧会 農商務省商品陳列			
19	「俘虜外出作業運動 ニ干スル注意報告」				
3. 8		・俘虜製作品展覧会		製作品展覧会での演技	俘虜製作品展覧会 (~17日)
9			・俘虜展覧見学		

11					撫養尋常高等小学校の 展覧会見学
23				俘虜製作品展覧会 出品者の撫養への遠足 (第1班) (第2班)	
24				復活祭散歩	
31					板東小学校の依頼で俘虜2名が動植物の標本作製
5.11				散歩	
19					
21		・全市湧く徳島空前の大賑ひ＝俘虜製作品大持日本産業の縮図			
26				新設の「収容所トゥルンフェライン」の最初のトゥルネン	
29	「俘虜運動施行ニ干スル注意報告」				
6. 1	「俘虜運動参観ニ干スル件報告」			日本人教師・生徒が所内へ体育・スポーツ活動の見学に訪れる	「M.A.K オーケストラ」による日本初の第九演奏
11	「植物標本作製ノ件」	・俘虜の造材着手			
20					山村伐採中、俘虜溺死
22					
6.24			・俘虜逃亡＝捕はる ・水死俘虜＝死体揚がる		
7. 6		・俘虜軍法会議へ三日に捕へられ		シュラークバル大会 (～30日)	
7					
11		・逃走俘虜は三年鳴門海峡を泳いで			
12		・横領俘虜懲役三カ年に処せられる (善通寺通信)			
15					独軍、最後の総攻撃開始 久留米より90名転収
8. 7				「収容所トゥルンフェライン」のヤーン祭	
11					「収容所郵便局」開設
25				今季最後の川での水浴	
9.30				「小ドイツ・トゥルネン祭」	
10. 6				大坂山への遠足	
22					キール軍港反乱 ヴィルヘルム2世退位 独、休戦条約調印
11. 9					
11					
20	「休戦ニ干シ俘虜感想内復ノ件報告」	・講和と俘虜 ＝板東俘虜収容所を訪う			
22					
12.25				全員散歩	
大正 8					
1. 7				散歩 1	
10				散歩 2	
12		・昨今の俘虜 *依然として徴語			
13				散歩 3	
15				散歩 4	
17				散歩 5	
18					パリ講和会議
21				日帰り遠足 1	
29				散歩 6	

31			散歩7	
2. 5			散歩8	
7			散歩9	
			柔道についてのスライ ド講習 (副曹長 Euchler)	第1回合同演奏会
12			散歩10	
13			伐採遠足11	
18			日帰り遠足2	
24			散歩12	
26			散歩13	
28			散歩14	
3. 4			日帰り遠足3	
7			散歩15	
14			日帰り遠足4	
18			散歩16	
20			「年配組遠足」	
21			日帰り遠足5	
25			散歩17	
29)			「スポーツの夕べ」	
30)				
4. 1			日帰り遠足6	
4			散歩18	
8			日帰り遠足7	
11			散歩19	
13			春のトゥルネン開始	
17			競歩大会	
18			散歩20	
20			競歩大会表彰式	
21			日帰り遠足8	
25			散歩21	
28			日帰り遠足9	
5. 2			散歩22	
6			日帰り遠足10	
7			春のテニス・トーナメ ント開始	
9			散歩23	
16			日帰り遠足11	9名のポーランド系俘 虜解放 隔離俘虜分置所閉鎖
19				
20			日帰り遠足12	
23			散歩24	
26			日帰り遠足13	
29			トゥルネン大会	
6. 1			日帰り遠足14	
3			” 15	
9			” 16	
20			” 17	
25				ベルサイユ条約調印
28			日帰り遠足18	
7. 9			” 19	
16			” 20	
21			” 21	
25			” 22	
29			” 23	
8. 4			” 24	
7				ヴァイマル憲法発布
11			日帰り遠足25 (水泳大会)	
13			日帰り遠足26	
			” 27	
15			” 28	
18			” 29	
21				シュレヴィヒ出身の7 名解放
25				
26				

28				〃	30	
9. 1				〃	31	
5				〃	32	
9		・一日千秋の思で十二月を待つ獨逸俘虜		〃	33	
17				日帰り遠足	34	
19				〃	35	
23				〃	36	
26				〃	37	
10. 3				〃	38	
7		・帰国の準備に大忙しの獨逸俘虜徳島市にて公開演説會開催準備				
8			・俘虜演藝會 プログラム發表			
9		・俘虜の芝居 ——十日から徳島市の劇場で公開				
10				日帰り遠足	40	
11				俘虜演芸会(～13日)		
12				日帰り遠足	41	徳島中学、演芸会観覧
13			・俘虜演藝會 一日 日延べ			
15				日帰り遠足	42	
17				〃	43	
19				〃	44	
21				〃	45	
24				〃	46	
26				〃	47	
29		・獨逸俘虜解放				
11. 5			・獨逸捕虜演武會			
8			・俘虜引渡準備 陸軍省の協議			
16		・昨今の獨逸俘虜は全くお客様扱い				
18			・板東の捕虜 いよいよ十二月中旬解放			
22			・俘虜を招聘す			
12. 3		・本月中旬解放				
19			・俘虜所持物証明			
24			・エンゲル園 俘虜の楽器を買い 込めて俘虜楽園に 負けぬ意気込			
25			・獨逸俘虜の解放 本日六〇三名神戸へ			
29			・俘虜の乗船 流石に獨逸流！			
大正 9						
1.10		・俘虜を教師に 松山高校で招聘				
12		・俘虜の残部 解放の時日				
16						アジア残留希望俘虜解放
19		・俘虜全部解放時日俘虜出発				
28		・逃走俘虜特赦				
2. 7						残りの俘虜解放 警察官出張所閉鎖 板東俘虜収容所閉鎖
8						

まねごとをするようになった。また、俘虜の学校への出張による体操の実技指導や小・中学校の教師・生徒による俘虜の体育・スポーツ活動の所内参観が実施された。大日本武徳会徳島支部は俘虜を招聘して「ドイツ武術研究会演武会」を開き、また収容所へ日本の武道家を派遣してその研究に努めた。ドイツ兵俘虜たちの体育・スポーツ活動は、地元の体育・スポーツの普及・発達に寄与するものであったと考えられる。

日本のスポーツの黎明期に、板東俘虜収容所では、俘虜たちによって、ドイツ人の体育・スポーツへの意欲が窺える活動が組織的に為されていたということ、また彼らの活動は地元の体育・スポーツの普及・発達に寄与するものであったと考えられるということは、日本の体育・スポーツ史上、注目すべき事実であると言える。ドイツ兵俘虜たちの活動の体育・スポーツ史上での評価については、今後さらに検討していきたい。

注

注1) 文献4)の「警備警察官報告書」の大正7年8月21日付「俘虜収容所名及人員表」では、この時点で俘虜数は4,627名で、「備考」として、それまでに、合計78名の釈放者、解放者、死亡者等があったと報告されている。

注2) 文献4)の「警備警察官報告書」の大正6年4月12日付「板東俘虜収容所人員表」では、当時953名であったと報告されているが、大正7年8月には久留米から90名が移送されてきており、同報告書の大正7年8月21日付「俘虜収容所名及人員表」には、1,028名と記されている。階級別では、将校26名、准士官76名、下士官144名、兵卒767名、文官其他15名と報告されている。なお、文献3)の「板東俘虜収容所沿革史」によると、俘虜の経済状態は次のようであった。将校および准士官には、毎月40円から100円の範囲内で各官等に応じて現金を支給し、自炊させていた。下士官には12円、兵卒には9円分の現品または現金を支給してい

た。准士官以上には経済上の問題はなかったが、下士官以下は、毎月の支給額が寡少であったので、所内で各自業務に従事し、その収入を生活費に充てていた。召集兵には、勤務先からの送金もあった。

注3) 鳴門市ドイツ館(注18)参照)にその複写がおかれており、筆者は特別に閲覧の機会を得た。なお、大正8年以降の「報告書」は、現段階では手にすることはできない。

注4) 「徳島日日新報」は、明治21年10月に「普通新聞」を改題して発刊された。「徳島毎日新聞」は、明治31年9月に創刊されたが、昭和16年12月14日に両新聞が廃刊となり、同16日、言論統一のため現在の「徳島新聞」が創刊された。徳島新聞社には、大正6年、同7年については「徳島毎日新聞」のみ、大正8年、同9年については「徳島日日新報」のみ保存されているので、本稿では両新聞で調べた年代が異なっている。両新聞とも、徳島新聞社で「特別閲覧」の許しを得てマイクロフィルムを見せていただいた。

注5) 板東俘虜収容所の俘虜たちによって書かれ、所内印刷所で印刷・発行されていた所内新聞。1917年9月30日に創刊され、1919年9月号が最終号となっている。この新聞の詳細に関しては、文献20)の拙稿を参照されたい。

注6) 前述の警備警察官出張所の所長が、収容所閉鎖後、収容所内での主なできごとや俘虜たちの生活状況などについて書き記したものの。

注7) 当時を知る人々の話や写真などを中心に構成されている徳島新聞連載の「帰らざるふるさと……俘虜収容所シリーズ」(昭和46年4月30日から同年9月15日までの間、88回にわたり連載された)や林の著書⁹⁾なども用いた。

注8) 以下、引用文の句読法は原文のままとする。

注9) 文献20)の拙稿を参照されたい。

注10) クラブの名称に用いられている Verein, Vereinigung, Klub は, ここでは, 内容的に見て特に区別する必要はないと考えられるので, 以下「クラブ」とした。

注11)注12)注13)注14)注15)上掲拙稿参照。

注16) 「テボール」は, ハンドボールの意と考えられるので, ファウストバルを指すと思われる。

注17) 「正教員」のことであろうと考えられる。

注18) 鳴門市は, ドイツ兵俘虜たちがのこした遺産と国際的友愛を永く後世に伝えるため, 収容所跡地近くに, 15世紀のドイツ民家を模した「ドイツ館」を建設した(昭和47年5月10日完成)。1階展示室には, 当時の収容所生活をしのぶことができる数々の資料や写真が展示されている。

注19) 前述のように, 現段階では大正8年以降の「報告書」を見ることはできないが, 「報告書」を随所に用いて板東俘虜収容所の全貌を描いたドキュメンタリー「桜とアザミ」(棟田博, 光人社, 1974.) には, 大正8年8月23日付で田岡貢巡查部長が, 「貧者俘虜ニ収入ノ途ヲ講ズルベク」松江所長が奔走した効果の特異な例として, 俘虜が巡回講師として小・中学校に招聘された旨の報告をしている, ということが次のように書かれている。

「去ル5日, 松江所長ノ斡旋ニヨリ撫養中学校ニオイテ, 国友板野郡長以下, 郡内各小・中学校長及ビ体操教師ヲ集メ, 俘虜『ウルブリッヒ』ホカ三名ニヨル体操ニ関スル講話並ビニ実技ガ紹介サレマシタ。当日ノ『ウルブリッヒ』ノ講話ハ貴重ナルタメ学校デ印刷サレマシタガ, ソノ大略ハ次ノゴトクデアリマス。『世界の体操は, ドイツ体操とスウェーデン体操が二大潮流をなしており……ドイツ体操はフリードリッヒ・ヤーンと言う人が始めたもので……木馬, 鞍馬, 鉄棒, 平行棒などをヤーンは発明案出した。……』右講話ノ後『ウルブリッヒ』ホカ三

名ノ体操実技ガ披露サレ, 参観者ニ多大ノ感銘ヲ与エマシタガ, コレガ機縁トナッテ『ウルブリッヒ』ホカ三名ハ, 各小・中学校ノ巡回講師ニ雇用サレタノデアリマス。」(pp. 261—62)。

これはあくまでもドキュメンタリーであり, ある程度の脚色がなされているのは否めない。しかし, 大正6年, 同7年の叙述を「報告書」の該当部分と比較検討してみると, 「報告書」がほぼ忠実に用いられていると言える。したがって, この叙述も「報告書」に基いて描かれたものであると思われる。この件に関しては, 大正8年以降の「報告書」を手にすることによってその解決をはかり, 改めて論じることしたい。

引用・参考文献

- 1) 板東俘虜収容所案内書 “Fremdenführer durch das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan”, August, 1918.
- 2) 板東俘虜収容所新聞 “Die Baracke-Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan” (September, 1917—September, 1919.)
- 3) 板西警察分署警備警察官出張所, 板東俘虜収容所沿革史。
- 4) 板西警察分署警備警察官出張所, 警備警察官報告書。
- 5) 林 啓介, 板東俘虜収容所, 井上書房, 1980, p. 156.
- 6) 木村 毅, 日本スポーツ文化史, 洋々社, 1956.
- 7) 木下秀明, スポーツの近代日本史, 杏林書院, 1972.
- 8) 岸野雄三 編, 近代体育スポーツ年表, 大修館, 1973.
- 9) 鳴門市立林崎小学校, 林崎小学校百周年記念誌, 1975, p. 26.
- 10) 鳴門市立撫養小学校, 撫養小学校沿革史, 1955, p. 201.
- 11) 大阪朝日新聞四国版。
- 12) 陸軍省「大正三年乃至九年戦役俘虜ニ関スル書類」(防衛庁防衛研究所蔵)。
- 13) Rüfer, H. und Rungas, W., Handbuch der Kriegsgefangenenpost Tsingtau, Postemgebilde “Rhein-Donau” eV.: Düsseldorf, 1964, p. 37.
- 14) 徳島県立城南高校, 徳島中学校・城南高校百年史, 1975, p. 183.
- 15) 徳島毎日新聞。
- 16) 徳島日日新報。
- 17) 徳島新聞「帰らざるふるさと(450) ……俘虜収容所④」(1971年7月7日付)。
- 18) 徳島新聞「帰らざるふるさと(456) ……俘虜収容所④」(1971年7月15日付)。

- 19) 徳島新聞「帰らざるふるさと(471) … 俘虜収容所②」 (1971年8月24日付).
20) 山田理恵「板東俘虜収容所新聞“Die Baracke”にみるドイツ兵俘虜の体育・スポーツ」体育史研究, 4: 26—39, 1987.
-